西大寺小塔院の調査

ー第 624・627・654 次

1　はじめに

今回報告する平城第 624・627・654 次調査の調査区は、いずれも平城京右京一条三坊七坪に位置し、西大寺小塔院の想定地にあたる（図 105）。本報告では、昨年度に実施した平城第 654 次調査の成果を中心とし、すでに『紀要 2021』で概要報告をおこなった平城第 624・627 次については、遺物の整理作業が終了したため、あわせて報告する[1)]。

2　遺跡の位置と環境

西大寺は、天平宝字８年（764）に、孝謙太上天皇（のちの称徳天皇）が、藤原仲麻呂の乱に際して、四天王像の造立を発願したことにはじまる。西大寺の伽藍の中でも、諸寺に分配された百万塔が納められていた場所が小塔院である。小塔院は、宝亀元年（770）に完成したとされ（『続日本紀』）、堂宇の構成が『西大寺資財流記帳』（以下、資財帳）に記されている。

・・・（前略）・・・

四王院

・・・（中略）・・・

小塔院

檜皮堂一宇〈長七丈。廣四丈。〉

檜皮細殿一宇〈長七丈。廣二丈。〉並板敷。

北檜皮房〈長九丈。廣二丈七尺。〉

次檜皮小房〈長九丈。廣一丈二尺。〉

食堂院

・・・（後略）・・・

このように小塔院には、檜皮葺きの建物が４棟存在したことが窺えるものの、その配置や基礎構造（礎石建物か掘立柱建物か）は不明である。小塔院の位置については、資財帳の各院の記載順によって想定されている。各院の記述は、金堂院の後、十一面堂院、西南角院、東南角院、四王院、小塔院、食堂院と続いており、配置に沿って、反時計回りの順番で記されたと考えられている。このことから、四王院の北、食堂院の南の一帯が小塔院に比定されている。

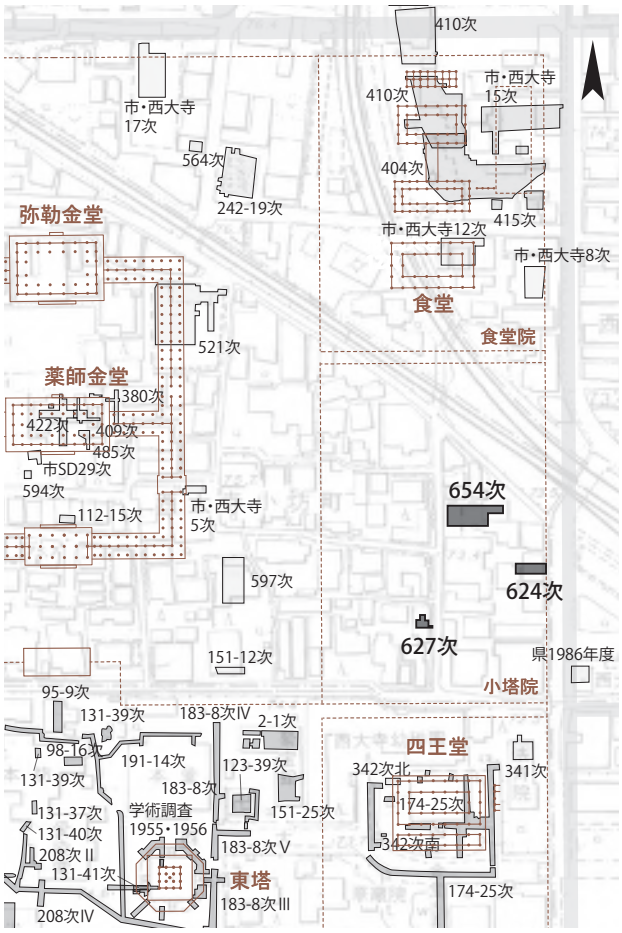

図 105　第 624・627・654 次調査区位置図　1：3000

今回報告する調査地の周辺では、食堂院（平城第 404・410・415 次[2)]、市 15 次[3)]等）、金堂院（平城第 409・422・505・521・655 次、『紀要 2007』・『同 2008』・『同 2012』・『同 2014』・本書 129～142 頁）、四王院の四王堂周囲の防災工事にともなう調査（平城第 174－25 次）[4)] 等がおこなわれているが、これまで小塔院周辺では調査がなされていなかった。なお、調査区北方の食堂院における調査では、食堂院東辺区画施設の西雨落溝に比定される溝を検出していることから[5)]、小塔院の東辺にあたる第 624 次調査区では、小塔院東辺区画施設の西雨落溝が検出されることが想定された。また、第 627・654 次調査区はともに小塔院の中軸付近にあたる。既往の西大寺の伽藍復元案では、中軸上に堂舎が並んでいる可能性が示されており[6)]、小塔院の堂舎に関わる遺構の存在が想定された。　**（田中龍一）**

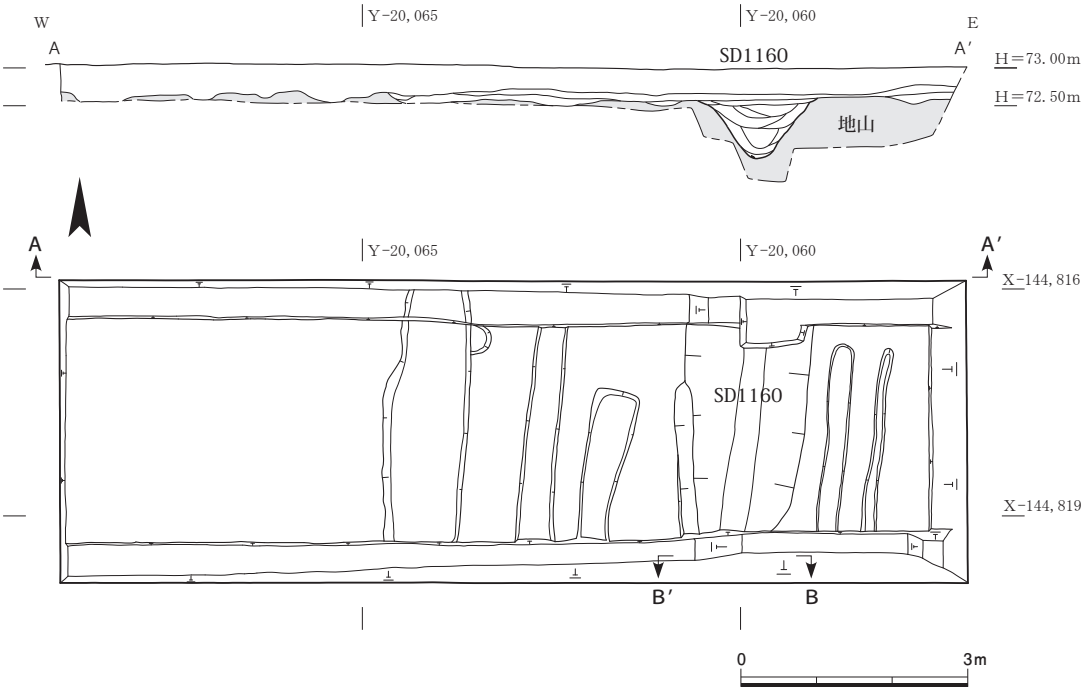

図 106　第 624 次調査区遺構図・北壁土層図　1：100

3　第 624 次調査

（1）調査の経過

調査に至る経緯　本調査は、西大寺小坊町における共同住宅建設にともなう発掘調査である。奈良県文化財保存課および奈良市教育委員会と協議の上、事業者からの受託事業実施申し込みを受けて奈文研が受託事業として調査を実施した。

作業の経過　調査期間は 2020 年 6 月 22 日から 6 月 24 日までである。6 月 22 日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動と現場の設営をおこない、重機掘削を開始した。重機掘削の終了後、人力による遺構検出を開始した。6 月 23 日に遺構検出および遺構掘削を終了し、平面図作成と壁面土層図の作成をおこなった。6 月 24 日に調査区全景写真を撮影し、遺構面保護のための砂を撒いたのち、埋め戻しを完了して調査を終了した。本調査では、調査終了後に洗浄・分類・註記作業を実施したのち、主要遺物について実測図化作業をおこなった。

（2）調査の方法と成果

調査の方法　小塔院の東辺区画施設の存在を予測し、調査区は東西 12 m、南北 4 mと東西に長く設定した。調査面積は 48㎡である。X・Y 座標はネットワーク型

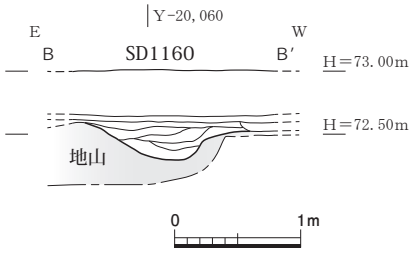

図 107　第 624 次調査区 SD1160 南壁土層図　1：60

RTK-GPS 測位（VRS 方式）でおこない、標高は旧平城 No.14（X=－145,126.190、Y=－19,244.829、H=69.071 m）からオートレベルで直接水準測量をおこなった[7]。表土および攪乱土、耕作土、床土については基本的に重機で掘削し、床土下部以下は人力による遺構検出・掘削作業をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

基本層序　現地表から表土・攪乱土（厚さ 20 ～ 40㎝）、その下に部分的に耕作土・床土（10 ～ 20㎝）があり、青灰色シルト（地山）となる。遺構検出は地山上面（標高 72.4 ～ 72.5 m）でおこなった（図 106）。

検出遺構　調査区の東半で南北溝 SD1160 を検出した（図 106･107、PL.36）。幅 1.5 m、深さは調査区北端で約 0.8 m、南端で約 0.3 mの素掘溝である。約 4 m分検出した。断面は逆台形状を呈する。溝は南北の調査区外へ続くが、底面の高さから北流していたと考えられる。埋土は灰褐

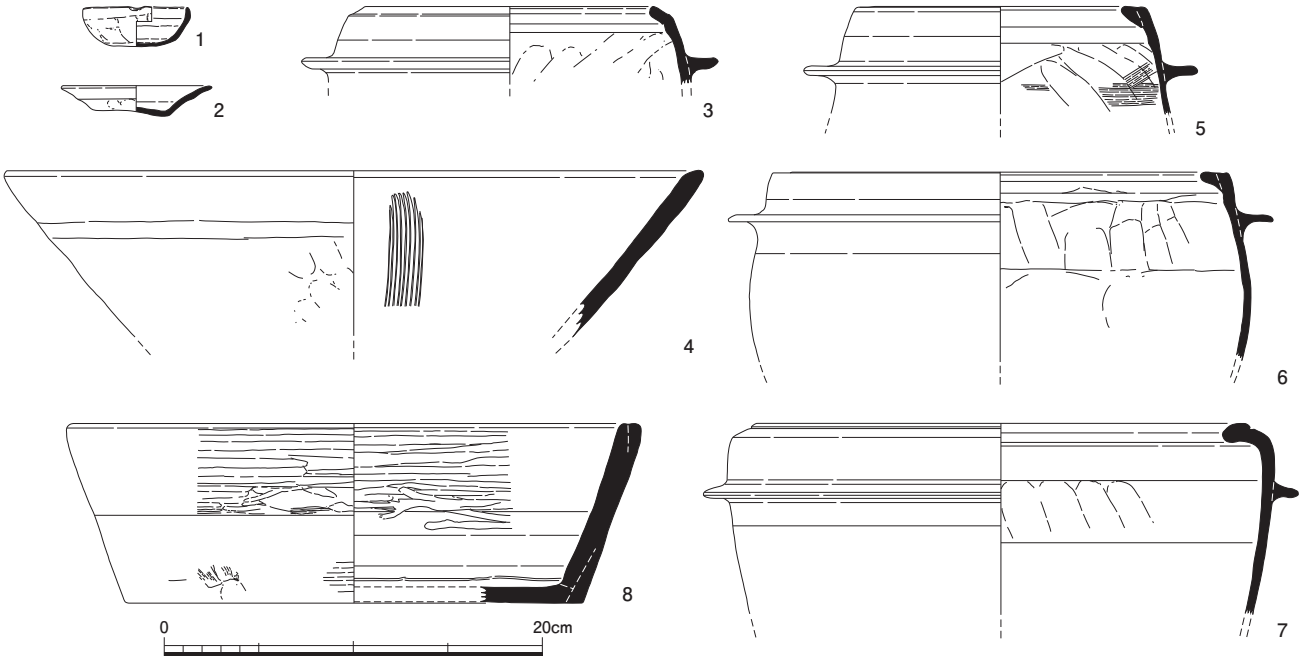

図 108　第 624 次調査出土土器　1：4

色～灰色の粘質土で、埋土中に土器片や瓦片を含む。最下層の粗砂層からは 14 世紀前半から 15 世紀前半頃の土器が出土しており、中世まで機能した溝と考えられる。

（浦　蓉子・田中）

（3）出土遺物

土器・土製品　第 624 次調査区からは整理用コンテナ２箱分の土器・土製品が出土した。中・近世の土師器・瓦質土器・陶磁器が中心で、わずかに奈良時代の須恵器・土師器などを一部含む。このほか緑釉陶器・龍泉窯系青磁片が出土した。これらの大半は SD1160 からの出土であり、以下 SD1160 出土土器について記述する[8]（図 108）。

１～４は灰褐色土層出土。１は土師器小皿。口径 5.7㎝で完形である。２は土師器皿。口径 8.0㎝。灰褐色を呈し、いわゆる白土器である。３は土師器羽釜。口縁部が内傾し、端部を丸くおさめる。４は瓦質のすり鉢。間隔の狭いすり目を疎に配置する。５～８は灰色粘土層出土。５～７は大和Ｈ型の土師器羽釜。５・６は口縁部が強く内傾し、端部を丸くおさめる。水平方向に延びる突帯を貼り付ける。５は体部が丸みをもち、外面にススが顕著に付着する。７は口縁端部を肥厚する。体部外面にやや短い突帯を貼り付ける。灰色粘土層と灰褐色土層出土の破片が接合した。８は瓦質土器鉢。器壁が厚く、端部を平坦につくる。

このほか最下層からは土師器羽釜の体部から突帯部の破片が出土している。

SD1160 出土土器はいずれも室町時代（14 世紀前半から 15 世紀前半頃）に位置づけられる。　（小田裕樹）

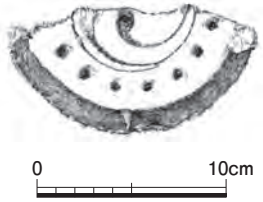

図 109　第 624 次調査出土軒瓦　1：4

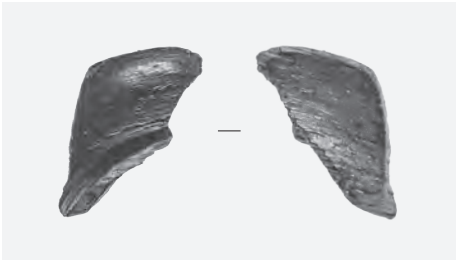

図 110　南北溝 SD1160 出土漆椀　約 1：2

瓦磚類　第 624 次調査区から出土した瓦磚類はごくわずかである。丸瓦は 122 点（14.034kg）、平瓦は 282 点（21.018kg）、磚１点（0.179kg）が出土した。図 109 は近世の巴文軒丸瓦である。　（田中）

その他の遺物　南北溝 SD1160 から漆椀が１点（図 110）、砥石が１点出土している。　（和田一之輔）

（4）小　結

第624次調査区では、南北溝SD1160を検出した。本調査区の北側でおこなった平城第404・415次調査では、西大寺食堂院の東辺区画施設の西雨落溝を踏襲したと解釈できる数条の溝を検出している。もっとも古い南北溝SD931は幅約3m、深さ約0.6mが残存する。溝心をY=－20,060.6ととらえ、これまでの西大寺伽藍の復元に用いられてきた平城京右京の条坊の振れ「北で0°19′50″西偏、西で0°18′58″」[9]によって南に延長すると、本調査区の南北溝SD1160の溝心（Y=－20,059.7）に一致する。このことから、南北溝SD1160は小塔院の東辺区画施設の西雨落溝を踏襲した溝である可能性が高い。溝の最下層からは中世の遺物が出土していることから、古代の溝の位置を踏襲しつつ、中世まで機能した溝と考えられる。

（浦）

4　第627次調査

（1）調査の経過

調査に至る経緯　本調査は、西大寺小坊町における個人住宅建設にともなう発掘調査である。調査地は西大寺小

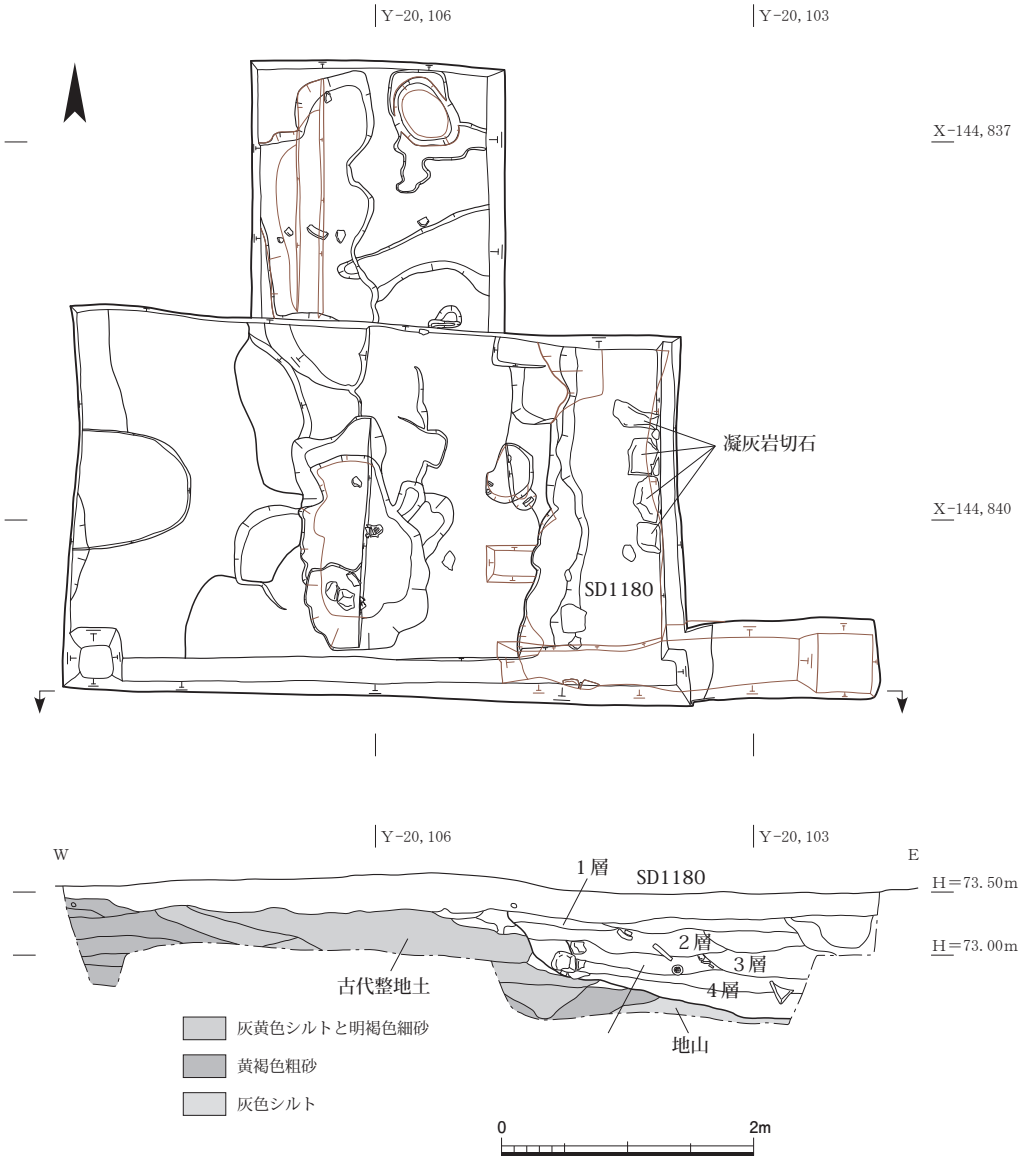

図111　第627次調査区遺構図・南壁土層図（東西反転）　1：60

塔院の東西中軸付近にあたり（図105）、遺構面および遺存状況の把握を目的として調査を実施した。

作業の経過　調査期間は2020年８月４日から８月11日までである。調査に先立ち、７月31日から８月３日にかけて基準点測量および調査区の設定、レベル移動をおこなった。８月４日に重機掘削を開始し、終了後、人力による遺構検出作業をおこなった。８月６日から遺構図の作成、８月７日には東拡張区の遺構検出・図面作成をおこない、東拡張区を含む調査区を埋め戻した。８月11日に北拡張区の遺構検出・図面作成ののち埋め戻しをおこなって、同日中に調査を終了した。調査終了後に洗浄・分類・註記作業を実施したのち、主要遺物について実測図化作業をおこなった。

（２）調査の方法と成果

調査の方法　当初、東西５ｍ、南北３ｍの調査区を設定したが、検出遺構が調査区外に延びることが判明したことから北側と東側に拡張をおこなった。最終的な調査面積は約21㎡である。

Ｘ・Ｙ座標はネットワーク型RTK-GPS測位（VRS方式）でおこない、標高は旧平城No.14（X=－145,126.190、Y=－19,244.829、H=69.071ｍ）からオートレベルで直接水準測量をおこなった[10]。表土および撹乱土については基本的に重機で掘削し、表土下部以下は人力により遺構検出および掘削作業をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

基本層序　表土（厚さ約30㎝）の下に、調査区中央では灰黄色シルトと明褐色細砂が互層となる層が、調査区西半では黄褐色細砂の層が広がる（厚さ約80㎝）（図111）。これらは古代にさかのぼる整地土とみられる。遺構検出はこれらの上面でおこなった。検出面の標高は73.2m前後である。これらの下層には遺物を含まない灰色シルト層が広がる。

検出遺構　調査区の東端、および東方拡張区で南北大溝SD1180を検出した（図111、PL.37-１・２）。幅2.8m以上、深さは約70㎝で、南北約３ｍ分を検出した。東肩は検出できず、溝幅は不明である。埋土は上層（１～３層）と下層（４層）に分けられ、上層には炭粒が混じり、溝底付近から多量の瓦や凝灰岩４点が出土した。埋土には中世の瓦や中近世の土器を含むが、上層から下層にかけて出土した土器に大きな時期差がないことから、江戸時代前期まで存続し、一時に埋め立てられたとみられる。調査区南方の平城第174-25次ではこの溝に対応する遺構は検出していない。　**（山崎有生・田中）**

（３）出土遺物

瓦磚類　第627次調査区から出土した瓦磚類の内訳を表19に示す。瓦磚類はSD1180を中心に出土しており、軒丸瓦は22点、軒平瓦 は８点を数えるが、大半が中・近世に属する（図112、PL.37-３）。

軒丸瓦　１は6236Aで西大寺創建瓦。焼成は軟質で、全体的に摩耗が激しい。SD1180第４層出土。２は西大寺181A。小型の巴文軒丸瓦で、瓦当面の直径は９㎝。SD1180第３層出土。３は巴文軒丸瓦。珠文はやや大振り。瓦当面の粘土は極めて薄く、丸瓦の先端は無加工である。SD1180出土。４・５は同笵の巴文軒丸瓦。小ぶりな珠文を密に配置する。４は、瓦当裏面はやや粗い指ナデで、凹凸が残る。SD1180第２層出土。５は巴文の中心に、径１㎜ほどの極めて小さな突起が認められる。異笵だが、同様の突起をもつ事例が法隆寺出土瓦にある[11]。コンパス針痕であると指摘されており、笵作成時の痕跡であると考えられる。包含層出土。６は巴文軒丸瓦。珠文は大振りで、珠文帯の内側には圏線が巡る。内区は巴文の尾部がわずかに残るのみである。珠文帯は笵傷が顕著で複数の珠文が繋がっている状況もみられる。外縁頂部を含む瓦当面には、離れ砂が付着する。SD1180第４層出土。７は巴文軒丸瓦。珠文は大振りで、珠文帯の内側には圏線が巡る。瓦当面には離れ砂が付着しており、文様の表出は浅い。鎌倉時代か。SD1180第３層出土。８は巴文軒丸瓦。珠文は大振りで、外縁頂部を含む瓦当面には、離れ砂が大量に付着する。室町時代。SD1180第２層出土。

表19　第627次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6236	A	1	西345B		1	平瓦	1
巴（鎌倉）		3	西348A		1	（刻印「菊花」）	1
（室町）		2	鎌倉		1	（タタキ）	1
（中世）		2	室町		2	磚（施釉）	1
西181A		1	中世		1	凝灰岩	3
鎌倉		1	時代不明		2	花崗岩	1
中世		1				安山岩	1
時代不明		11					
軒丸瓦計		22	軒平瓦計		8	その他計	9

	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	58.675kg	130.238kg	1.569kg	43.157kg	0
点数	301	958	3	23	0

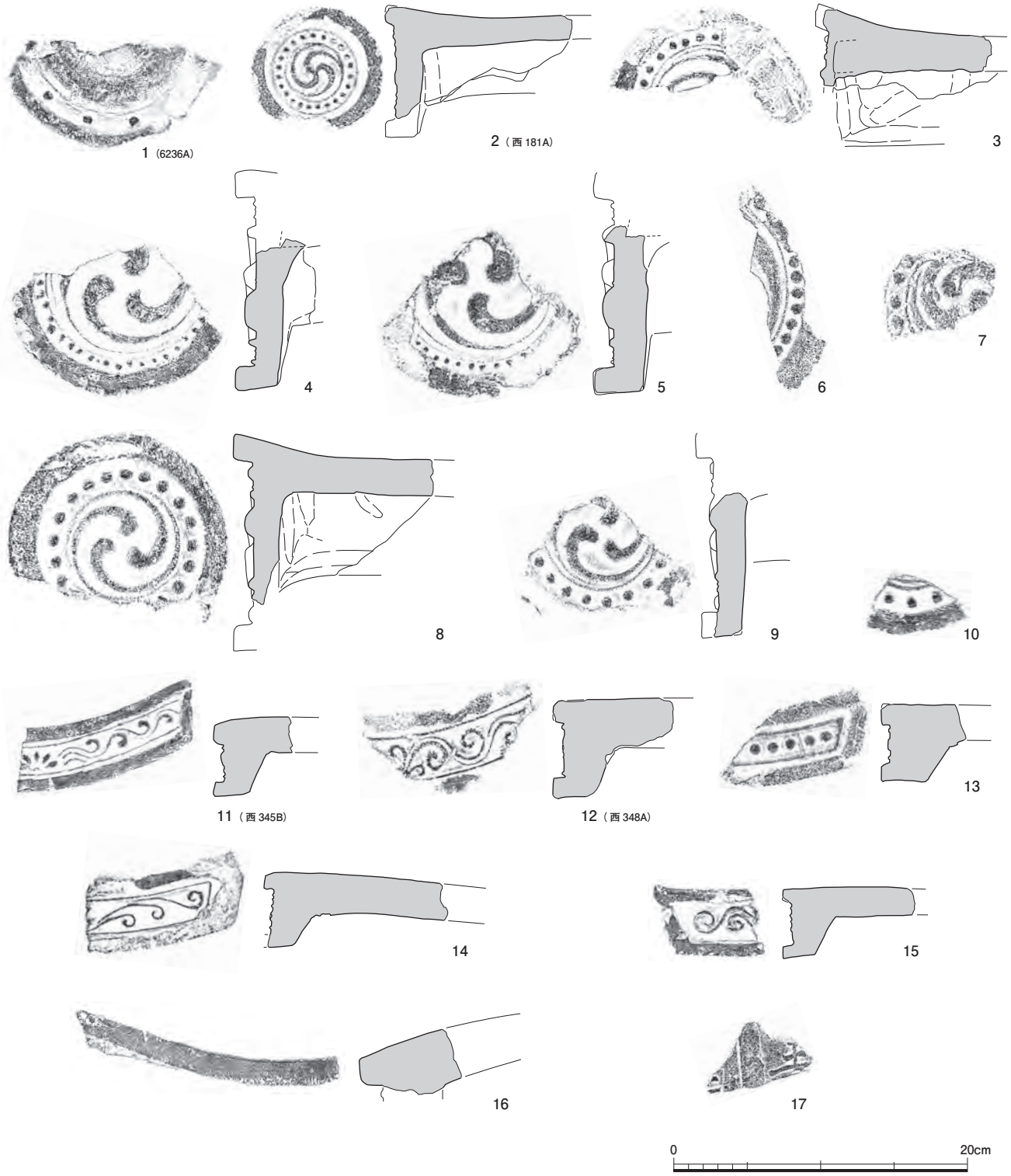

図 112　第 627 次調査出土瓦　1：4

9 は巴文軒丸瓦。珠文はやや大振りで、珠文帯の内側には太い圏線が巡る。瓦当面には離れ砂が付着し、全体にはいぶしがかかる。室町時代。SD1180 第 2 層以下出土。10 は巴文軒丸瓦か。珠文はやや大振りで、外縁を含む瓦当面には離れ砂が付着。室町時代か。SD1180 第 3 層出土。

軒平瓦　11 は西大寺 345B。半截菊花文を中心に置く均整唐草文。顎面・顎部瓦当裏面は横ナデで、顎部に凹型台圧痕が残る。室町時代。SD1180 第 3 層出土。12 は西大寺 348A。半截菊花文を中心に置く均整唐草文で、唐草は大きく巻き込む。顎面・顎部瓦当裏面は横ナデで、顎部に凹型台圧痕が残る。室町時代。13 は圏線をもつ連珠文軒平瓦。顎部瓦当裏面は縦ナデの痕跡と凹型台圧痕が残る。鎌倉時代。14 は、緩やかに巻き込む均整唐草文。顎面・顎部瓦当裏面は横ナデ、顎部に凹型台圧痕が残り、凸面は縦ナデを施す。断面観察から瓦当貼り付け技法と考えられる。室町時代。SD1180 第 2 層出土。15 は均整

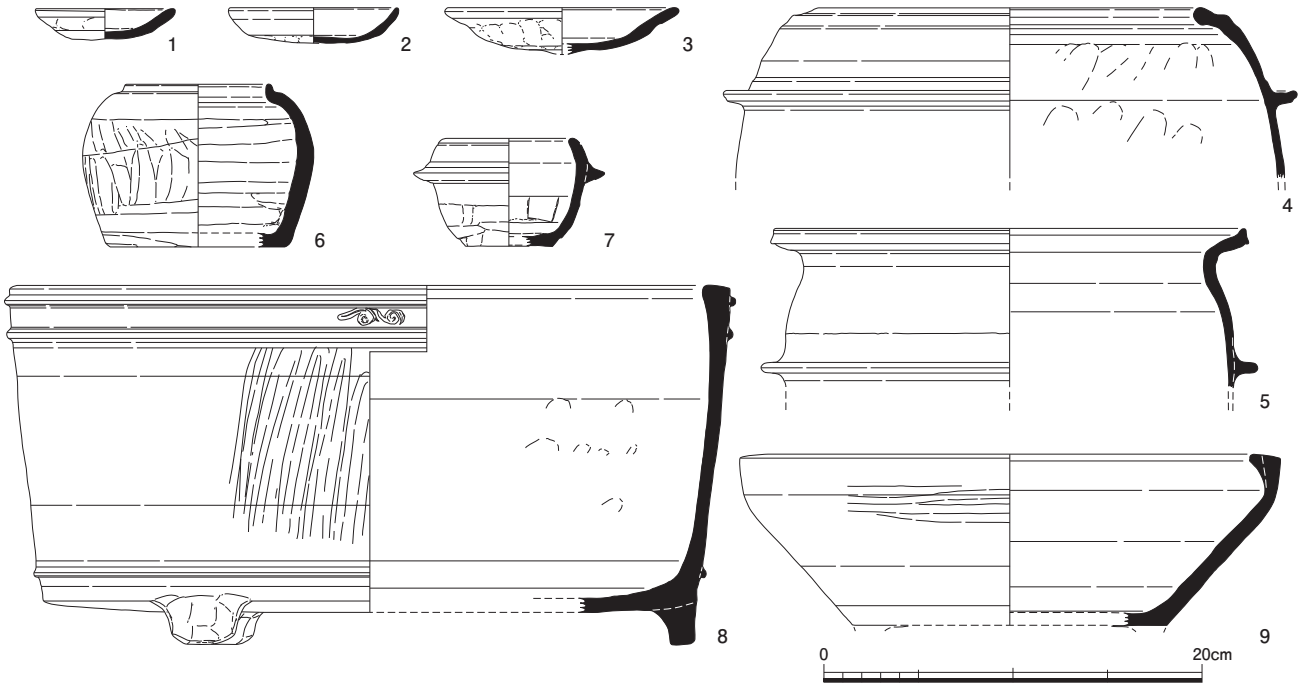

図 113　第 627 次調査出土土器　1：4

唐草文か。凹面に細かい布目痕を残す。顎面・顎部瓦当裏面は横ナデ、凸面は縦ナデを施す。室町時代。16 は型式不明の軒平瓦。瓦当面は上外縁が残るのみである。外縁には縦方向の２本の刻線がある。顎部には凹型台圧痕が残る。17 は平瓦。文字を刻んだ叩き具で凸面を叩き締める。一文字のみわずかに残り、「寺」と考えられる。鎌倉時代。

このほか、緑釉磚１点、凝灰岩切石等が出土した。**（田中）**

土器・土製品　第 627 次調査区から整理用コンテナ５箱分の土器・土製品が出土した。このうち３箱は SD1180 から出土した。SD1180 出土土器は室町時代から江戸時代前半の土師器羽釜・瓦質土器の火鉢・すり鉢が中心で、近世土師器皿・陶磁器を少量含む。４層に分けて取り上げたが、相互に接合関係を確認した。以下、図示し得る破片が多く出土した第４層出土土器について記述する（図 113）。

１～３は土師器皿。復元口径は順に 7.4・9.0・12.4㎝である。４・５は土師器羽釜。４は大和Ｈ型で口縁部が内傾し、端部を丸くおさめる。復元口径 20.4㎝。５は大和Ｉ型で口縁部が外反し、端部を横ナデし肥厚する。体部の突帯上位に突帯状の段を有する。復元口径 25.2㎝。６～９は瓦質土器。６は火消し壺。口径 7.6㎝、器高 8.6㎝。７はミニチュア羽釜。復元口径 6.2㎝、器高 5.7㎝である。８・９は火鉢。８は方形を呈し、低い脚部を有する。口縁部外面に二条の突帯を貼り付け、突帯間に唐草を施文する。９は円形を呈し、体部から内湾気味に丸みを帯びて口縁部が立ち上がり、口縁端部上面に平坦面を有する。底部に剝離痕跡があり、脚部を貼り付けていたものとみられる。第２層出土破片と接合した。**（小田）**

５　第 654 次調査

（１）調査の経過

調査に至る経緯　本調査は、共同住宅建設にともなう発掘調査である。奈良県文化財保存課および奈良市教育委員会と協議の上、事業者からの受託事業実施申し込みを受けて奈文研が受託事業として調査を実施した。

作業の経過　調査期間は 2023 年１月 11 日から２月３日までである。発掘作業に先立って、１月６日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動を実施した。１月 11 日から重機による掘削を開始し、順次人力掘削に切り替えて遺構検出をおこなった。１月 16 日に Y=－20,089 以西の全景写真の撮影を実施したのち、Y=－20,089 以東の掘削と遺構検出を進めた。１月 18 日に調査区東部・西部全景写真の撮影をおこなったのち、断割調査、図面作成、完掘を進めた。調査終了部分に対する遺構保護のための砂撒きをおこなったのち、１月 24 日に調査区東部・西部の埋め戻しを完了した。同日以降、調査区中央部の掘削・遺構検出をおこない、１月 30 日に全景写真の撮影をおこなった。同日以降、下層調査や断割調査、図面作成、完掘を進めた。２月３日に遺構保護のための砂撒きと埋め戻し、撤収を完了し、調査を終了した。

本調査では、発掘調査と並行して出土遺物の洗浄・分類・註記作業を実施し、主要な遺物の実測をおこなった。

（２）調査の方法

調査区は、東西最大 22 m、南北最大８ｍで設定したが、Y=－20,081 以東は後世の削平が著しく部分的な調査に留めたため、最終的な調査面積は 146㎡である。Ｘ・

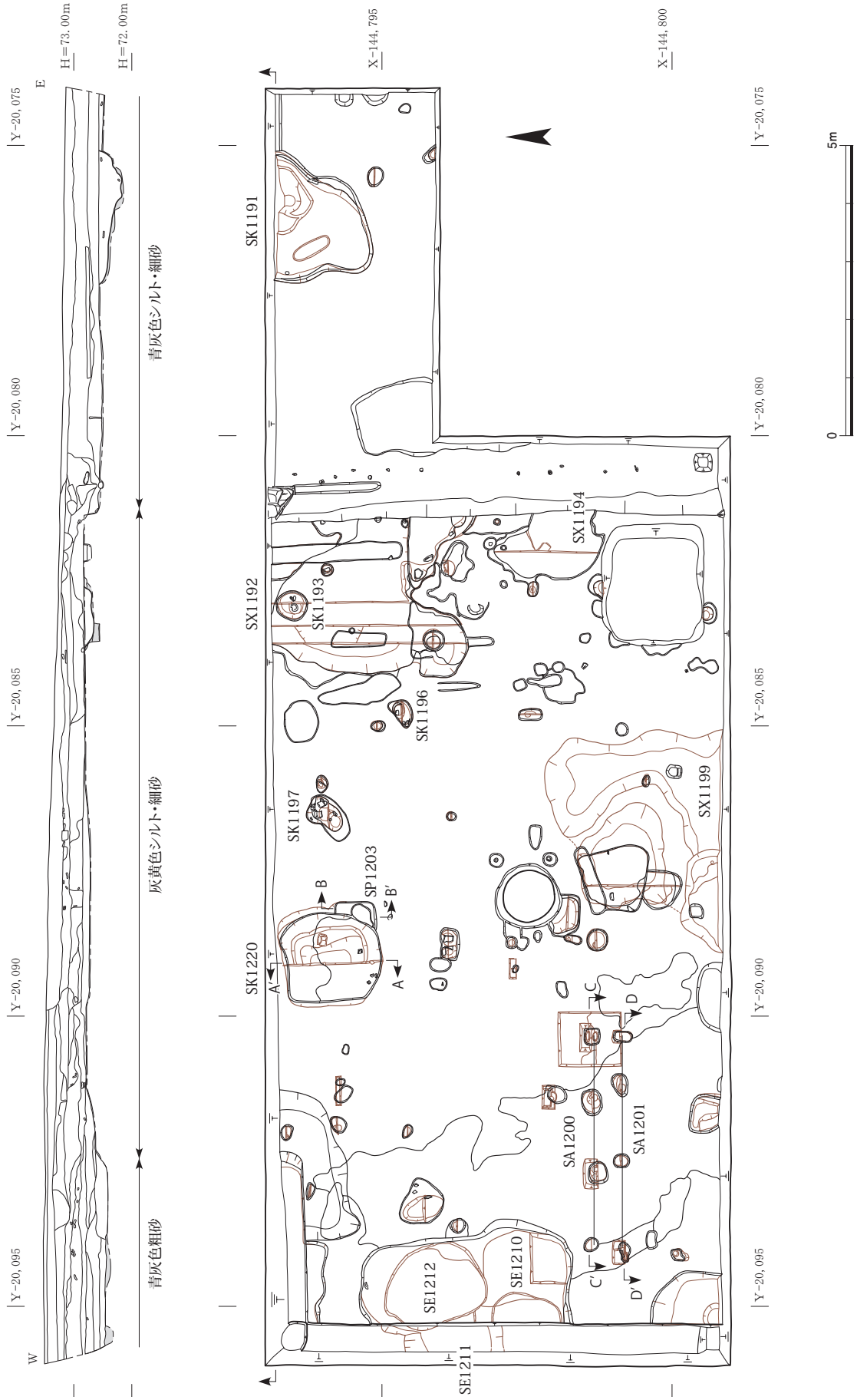

図 114　第 654 次調査区遺構図・北壁土層図　1：100

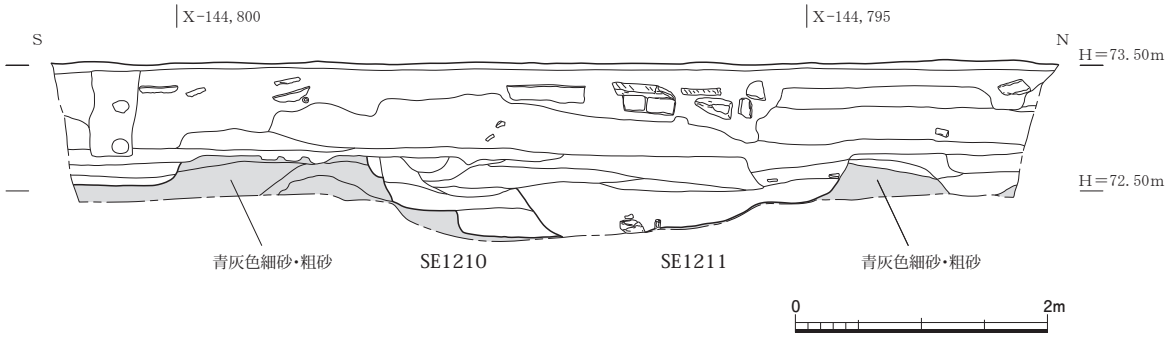

図 115　第 654 次調査区西壁土層図　1：60

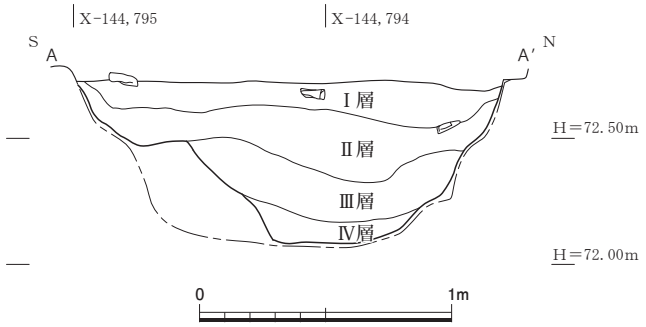

図 116　土坑 SK1220 断面図　1：30

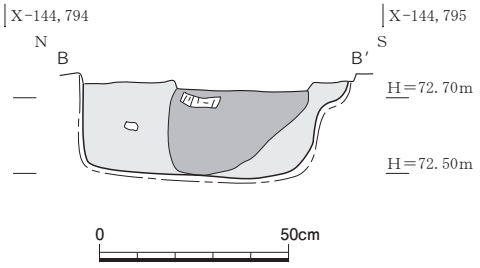

図 117　柱穴 SP1203 断面図　1：20

Y 座標はネットワーク型 RTK-GPS 測位（VRS 方式）でおこない、標高は、旧平城 No.14（X=－145,126.190、Y=－19,244.829、H=69.071 m）を基準として平城第 627 次調査（2020 年度）で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった[12)]。

発掘作業は重機掘削により表土・造成土および遺物包含層の上部を除去した後、人力により掘削および遺構検出をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

（3）基本層序

現地表から順に表土・造成土（厚さ 40 ～ 70㎝）、暗灰色砂質土（遺物包含層、5 ～ 10㎝）が堆積し、調査区東部では青灰色シルト・細砂層（地山）に達する（図 114）。調査区中央部では暗灰色砂質土の下に明褐色粗砂（厚さ約 5 ㎝）が部分的に堆積し、灰黄色シルト・細砂層（地山、厚さ 10 ～ 70㎝）に達する。さらに下層では有機質を含む灰色砂を確認した（厚さ 20㎝以上）。調査区西部では暗灰色砂質土の下に青灰色細砂・粗砂や有機質を含む灰色砂を確認した（厚さ 70㎝以上）。これは洪水堆積にともなうものと考えられる。

遺構検出は、調査区東部では青灰色シルト・細砂層の上面、調査区中央部では灰黄色シルト・細砂層の上面、調査区西部では青灰色細砂・粗砂の上面でおこなった。検出面の標高は 72.8m 前後である。なお、調査区東部では南北に延びる近現代の石組を検出した。石組以東の遺構面はさらに 30㎝ほど削平されており、標高 72.5m 前後の青灰色シルト・細砂層の上面で遺構検出をおこなった。

（4）検出遺構（図 114、PL.38、PL.39-1・2）

井戸 SE1210　調査区西端で検出した井戸。規模は東西 2 m 以上、南北約 1.5m で、深さは 0.5 ～ 0.6m。底面は、湧水が顕著な青灰色粗砂層まで到達している。後述の SE1211・1212 と重複しており、その中で最も古い（図 115、PL.39-3）。掘方と抜取穴を確認したが、井戸枠は遺存していなかった。掘方・抜取穴から室町時代までの土器や瓦が出土した。抜取穴の埋土からは、桶側板の破片に加え、ハエの蛹を 62 個採取した。

井戸 SE1211　調査区西端で検出した井戸。深さは約 0.4m。調査区西壁にかかるため、東半部を検出したにとどまる。SE1210・1212 と重複しており、埋土が酷似することから、井戸の可能性が高い。室町時代の SE1210 より新しく、SE1212 よりも古いことから、SE1211 も室町時代に属すると考えられる。

井戸 SE1212　調査区西端で検出した井戸。東西 1.6m、南北 2.2 m で、深さは 0.5 ～ 0.6m。先述の SE1210・1211 と重複しており、最も新しい。掘方と抜取穴を確認したが、井戸枠は遺存していなかった。掘方・抜取穴から室町時代までの土器や瓦が出土した。

土坑 SK1220　調査区北辺中央部で検出した東西約 1.7 m、南北約 1.7m、深さ約 0.7m の土坑。隅丸方形に近い

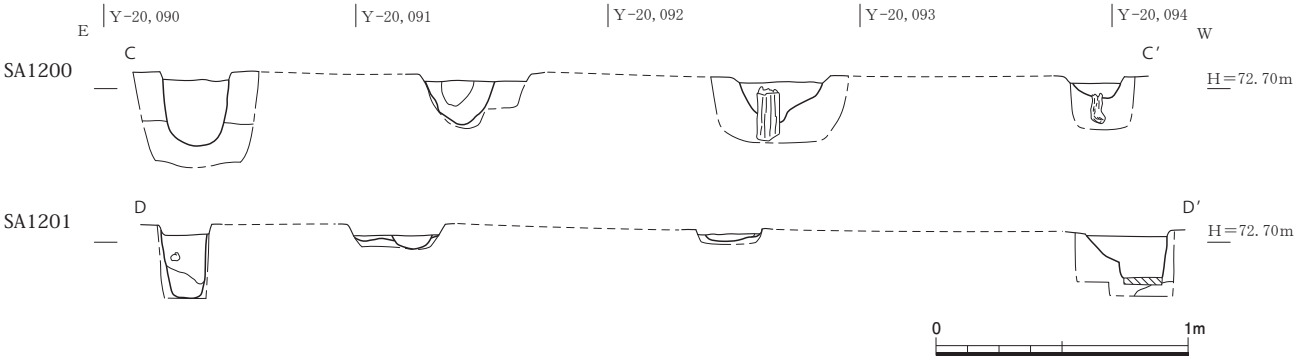

図 118　東西柱穴列 SA1200・1201 断面図　1：30

平面形を呈するが、底面付近は不整形である。埋土は上層からⅠ～Ⅳ層に分かれ、おおよそ水平に堆積している（図 116、PL.39-4）。柱痕跡や抜取穴は確認できない。最上層のⅠ層は、鎌倉～室町時代の土器・瓦を含む。Ⅱ～Ⅳ層は、古代の遺物を含むものの、小片がほとんどである。

柱穴 SP1203　調査区西北部で検出した南北約 0.7m、深さ約 0.25m の柱穴（図 117）。西半が SK1220 と重複し、SK1220 よりも古い。掘方と抜取穴を確認した。掘方・抜取穴からは古代の土器類が出土したほか、抜取穴から奈良時代後半、西大寺造営前の軒丸瓦が 1 点出土した。

東西柱穴列 SA1200　調査区西南部で検出した東西方向に伸びる柱穴列。小柱穴を 4 基、東西 3.6 m分を確認した。柱間は 1.1m ～ 1.3m と不揃いである。柱穴の直径 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mであり、一部で柱根を確認した（図 118 上）。土器や瓦の出土はなく、時期不明。

東西柱穴列 SA1201　調査区西南部、SA1200 の南で検出した東西方向に伸びる柱穴列。小柱穴を 4 基、東西 3.8 m分を確認した。柱間は 0.9m ～ 1.6m と不揃いである。柱穴の直径 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mであり、一部では柱根や礎板を確認した（図 118 下）。土器や瓦の出土はなく、時期不明。

土坑 SK1191　調査区東北部で検出した東西約 2.2m、南北 1.7m 以上の不整形土坑。深さ約 0.4m。出土遺物から中世に属する。

落込 SX1192　調査区北辺中央部で検出した不整形な落ち込み。東西 3 m以上、南北 3.5m 以上。深さ 0.1 ～ 0.5m。近世の遺物が出土した。

土坑 SK1193　調査区北辺中央部の落込 SX1192 上面で検出した円形の土坑。直径約 0.5m、深さ約 0.2m。中世の土師器が出土した。

土坑 SK1196　調査区中央部で検出した不整形の土坑。東西約 0.4m、南北約 0.5m、深さ約 5 ㎝。古代の土師器が完形で出土した。

落込 SX1194　調査区中央やや東寄りで検出した不整形な落ち込み。東西 2 m以上、南北約 3 m。深さ約 0.1m。埋土に炭を含む。中世の遺物が出土した。

落込 SX1199　調査区南部で検出した不整形な落ち込み。東西約 4 m、南北 3 m以上。深さ 0.2 ～ 0.3m。近世の遺物が出土した。

その他の遺構　調査区各所で、不整形の土坑や小柱穴を検出した。多くは中世もしくは近世までの遺物を含む。

（5）出土遺物

瓦磚類

第 654 次調査区で出土した瓦磚類の内訳を表 20 に示す。中世の瓦磚類が中心で、軒丸瓦は 9 点、軒平瓦は 5 点出土した（図 119、PL.40-1）。

軒丸瓦　1 は 6134Ab。西大寺では、食堂院での出土例がある[13]。Ⅳ-1 期（757 ～ 767）で西大寺造営前に位置づけられる。SP1203 抜取穴出土。2 は西大寺 84A。丸瓦は剥離しており、その接合痕跡が残る。同笵例は、瓦当厚が約 4 ㎝ と厚手である。鎌倉時代。SK1197 出土。3 は西大寺 62A。外区圏線と外縁の間に大きな笵傷がある。平安時代後期。SE1212 抜取穴出土。4 は西大寺 164C。左巻きの三巴文。丸瓦は剥離し、その接合痕跡が残る。鎌倉～室町時代。SE1212 掘方出土。5・6 は、型式不明でともに造成土出土。5 は外区珠文帯のみ残る。胎土・焼成や外縁のつくりから中世のものと考えられる。6 は近代の巴文軒丸瓦。

軒平瓦　7 は西大寺 268A。外区をもたない偏行唐草文。瓦当部は、糸切粘土板の凸面に顎部粘土を接合する。8 は、西大寺 392E。包含層出土。連珠文軒平瓦。顎部瓦当裏面から凸面にかけてタテナデで仕上げる。顎部に凹型台圧痕が残る。9 は、唐草文軒平瓦。包含層出土。顎部瓦当裏面はヨコナデ、凸面はタテナデで仕上げる。顎部に凹型台圧痕が残る。

平　瓦　10・11 は鎌倉時代。ともに文様を刻んだ縦長

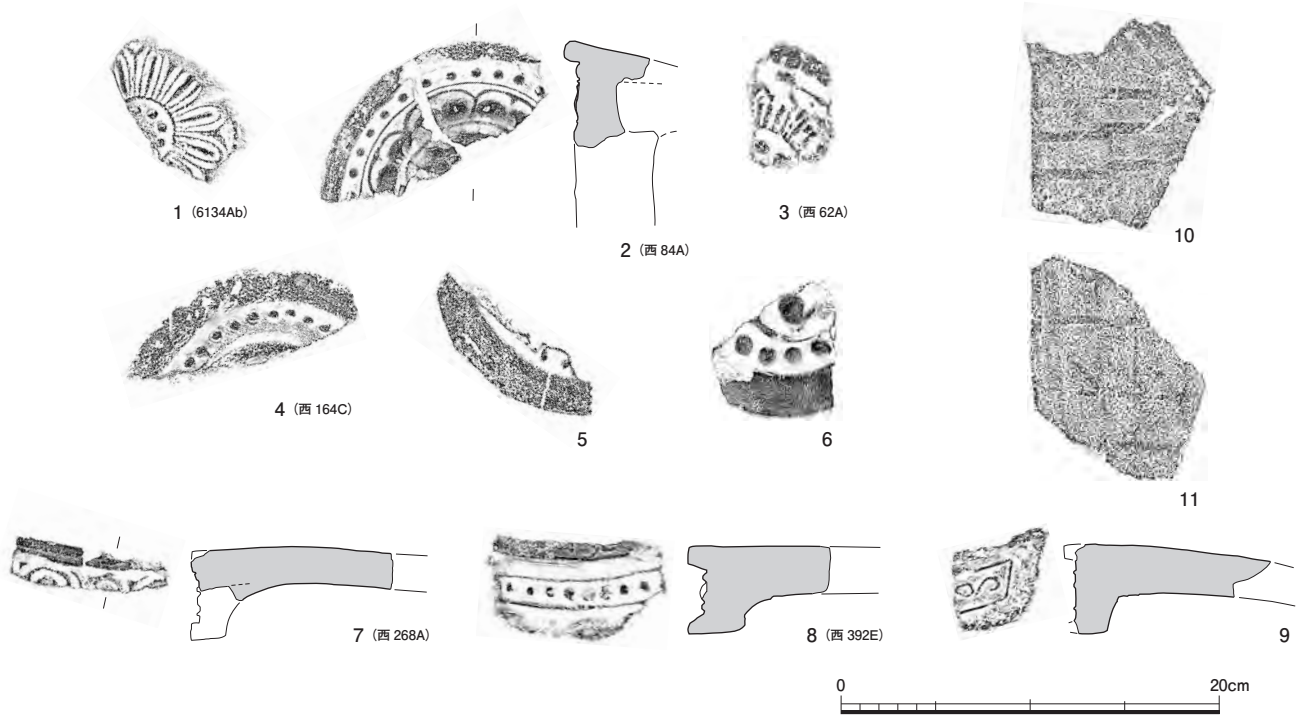

図 119　第 654 次調査出土瓦　1：4

の叩き板で凸面を叩く。10 は、凹面に布目痕はなく、離れ砂が残る。SX1199 出土。11 は凹面に細かい布目痕を残す。SE1212 掘方出土。　**（田中）**

土器・土製品

第 654 次調査区からは整理用コンテナ 5 箱分の土器・土製品が出土した。中・近世の土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器が中心で、奈良時代の須恵器・土師器などを一部含む。以下、各遺構出土土器について記述する（図 120）。

SK1196 出土土器　1 は完形の土師器杯 A。外面調整は c 手法である。内面の暗文や外面のヘラミガキは確認できない。平城宮土器Ⅲ新～Ⅴに位置づけられる。このほか土師器皿Ｂの脚部のみが出土した。

SK1191 出土土器　2 は土師器皿。灰白色の色調を呈し、口縁部に一段ナデを施す。復元口径 10.4㎝。

SK1193 出土土器　3・4 は土師器皿（PL.39-5）。3 は灰白色の色調を呈し、口縁部に一段ナデを施す。復元口径 7.0㎝。4 は赤褐色の色調を呈し口縁部に二段ナデを施す。口径 10.8㎝。これらの土器は大乗院編年Ⅲ-A 期[14]に属する。

SK1220 出土土器・土製品　5 は宝珠硯の可能性がある（PL.39-6）。先端の堤部から海部にかけて剥離痕跡があり、筆立てなどが貼り付けられていたとみられる。6 は須恵器杯Ｂ蓋。低平な宝珠つまみを貼り付ける。7 は緑釉陶器椀の底部片。内外面に緑釉を施しており、底部外面まで施釉する。内面に目跡が残る。8・9 は瓦器椀。8 は口縁部内外面にやや粗いヘラミガキを施す。9 は高台の断面形が三角形を呈し、退化傾向にある。川越編年第Ⅲ段階に属する[15]。SK1220 出土土器は奈良時代の遺物を含むが、廃棄時期は室町時代とみられる。

表 20　第 654 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6134	Ab	1	西268A		1	目板瓦	1
巴（近代）		1	西392E		1	磚	1
西62A		1	室町		1		
西84A		1	時代不明		2		
西164C		1					
中世		1					
時代不明		3					
軒丸瓦計		9	軒平瓦計		5	その他計	2

	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	42.885kg	120.143kg	10.25kg	0	0
点数	444	1,565	6	0	0

SE1210 出土土器　11 は掘方、12 は抜取穴出土。11 は瓦質土器の方形火鉢。外面に装飾はなく、頂部に平坦面を有する。12 は瓦器椀。器壁が厚く、ヘラミガキを密に施す。川越編年第Ⅲ段階であり、鎌倉時代末～室町時代前期の特徴を有する。

SE1211 出土土器・土製品　13 は須恵質不明土製品（PL.39-7）。直径 5.5㎝の円形の平面形態を呈し、内面はロクロナデ調整を施す。頂部に吊り手状の凸部を有し、直径 1.1㎝の棒状工具による穿孔がある。このほか、土師器小皿・瓦器椀片が出土した。

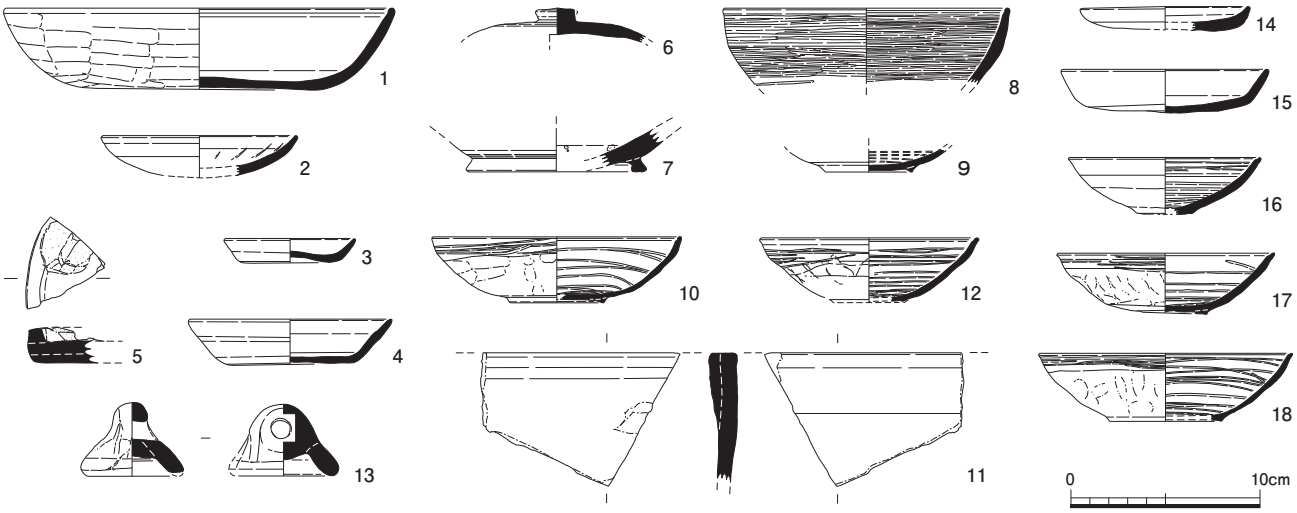

図 120　第 654 次調査出土土器　1：4

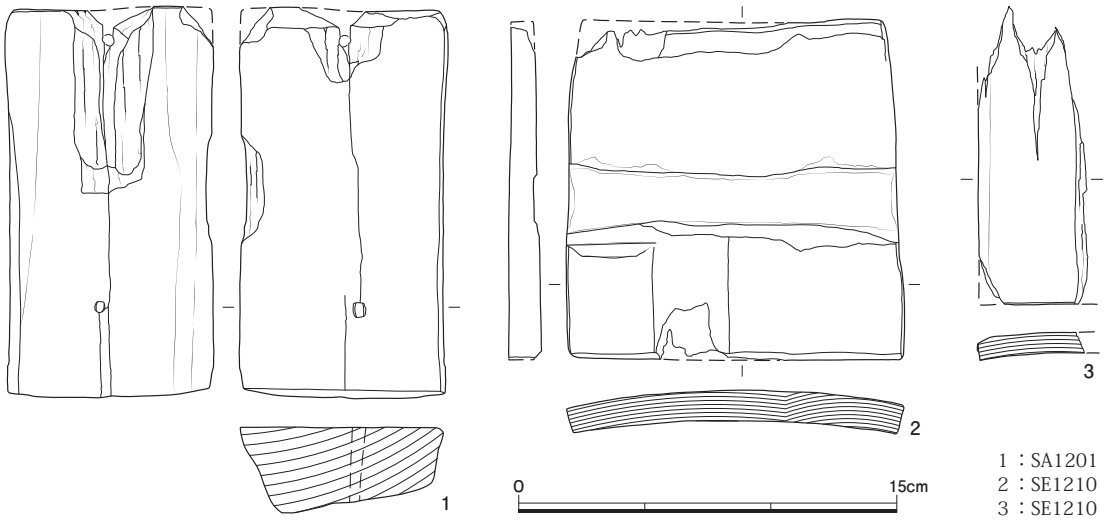

図 121　第 654 次調査出土木器　1：3

SE1212 出土土器　10 は掘方出土の瓦器椀。器高が低い形態で、器壁が薄く外面のヘラミガキの間隔は粗い。このほか、室町時代の土師器小皿・土釜片が出土している。なお印判染付椀が 1 点出土しているが、これは重複する近代攪乱遺構からの混入と考えられる。

SX1194 出土土器　14・15 は土師器皿。14 は底部から緩やかに口縁部が立ち上がる。復元口径 9.0㎝。15 は平底気味の底部から口縁部が立ち上がり口縁部に一段ナデ調整を施す。口径 11.0㎝。16 ～ 18 は瓦器椀。いずれも口縁端部に強いヨコナデを施す。内外面にヘラミガキを施す。低平な高台を貼り付けるが痕跡的である。これらは SE1210・SE1212 と同様、室町時代の特徴を有する。

このほか、特殊遺物として製塩土器・灰釉陶器・緑釉陶器・灯明皿に転用した土師器が出土した。　**（小田）**

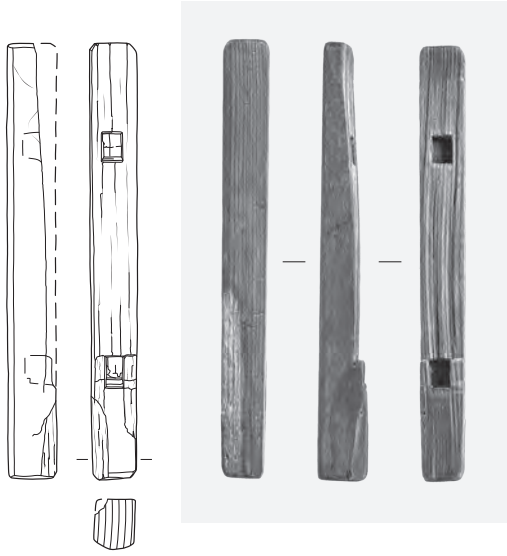

図 122　第 654 次調査落込 SX1199 出土角棒　1：3

木器・石器

小コンテナ５箱分の木器が出土しているが、大半は加工痕をとどめない雑木や自然木である。PL.18-２はSA1200・1201等から出土した柱根と礎板。礎板は釘穴があり転用品（図121-１）。SA1201出土。SE1210からは桶の側板（図121-２・３）と自然木（PL.40-３）が出土。図122は角棒で、両端付近にそれぞれ未貫通の方孔をもつ。長さ17.3㎝、厚さ2.0㎝。糸巻の枠木に似る。SX1199出土。このほか、SK1220とSX1192からサヌカイト剥片が各１点出土している。 **（和田）**

６　まとめ

第624次調査　西大寺小塔院の東辺区画施設の西雨落溝を踏襲したとみられる南北溝SD1160を検出した。当調査区の現地表面の標高は、周辺の既調査（平城第174-25・404・415・597次）の遺構面よりさらに20㎝以上低い。そのため、小塔院の東辺に想定される区画施設自体を検出することはできなかったが、これまで調査が進んでいなかった西大寺小塔院についての知見を加えることができた。 **（浦）**

第627次調査　中近世の南北大溝SD1180を検出した。江戸時代前期まで機能し、短期間で埋め立てられた様子がうかがえる。性格は不明だが、出土した瓦および凝灰岩切石の存在からは、近傍に古代・中世の西大寺に関わる遺構が存在した可能性も想定できる。 **（山崎）**

第654次調査　調査区西端で室町時代の井戸３基を検出したほか、調査区各所で中世から近世にかけての土坑や落ち込みを確認した。一方で、明確な古代の遺構はほとんど確認できなかった。遺物も中世の土器・瓦類が多く出土しており、調査地周辺では、中世を中心とした活発な土地利用がおこなわれたと考えられる。

発掘調査成果からみた小塔院推定地　今回報告した第624・627・654次調査により、これまでほとんど調査がおこなわれていなかった小塔院推定地の様相を考えるうえで重要な知見を得た。

第624次調査では東辺区画施設の西雨落溝を踏襲したとみられる中世の南北溝を、第627・654次調査では小塔院の中軸付近を調査し、中世～近世の南北溝や井戸などの遺構を確認した。いずれの調査区でも遺構・遺物ともに中世以降のものが多い点で共通する。

中世の小塔院推定地を考えるうえで参考になるのが、室町時代に描かれたとされる「西大寺寺中曼荼羅図」（西大寺蔵）である。「西大寺寺中曼荼羅図」は、築地で囲まれた当時の境内を、約130分の１の縮尺でかなり正確な位置関係で描いていると指摘される[16]。この絵図と伽藍復元図、今回の調査区の位置を重ね合わせたものが図123である。小塔院推定地周辺をみると、四王堂の北側の東西道路[17]よりも北側には、築地で囲われた区画がある。一帯は「寺内」と記され小規模な草葺きの建物が５棟描かれている。第627次調査区は、「寺内」もしくは東西築地の周辺にあたり、第624次調査区及び第654次調査区は築地の外側にあたる可能性が高い。なお、この絵図は食堂が描かれていないことから、徳治２年（1307）以降のものと考えられる[18]。

一方で、これまでの調査では、西大寺創建期の小塔院に関連する明確な遺構は確認されていない。古代のものとみられる整地土を検出した第627次の遺構検出面の標高は73.2m前後で、整地土の下層にある地山は、72.7m前後で確認されている。対して、整地土が確認できなかった第624次調査区の遺構検出面（地山上面）の標高は72.4～72.5 m、同じく明確な整地土が確認できなかった第654次の検出面の標高は72.5～72.8mとなっており、一定程度の削平を受けている可能性が考えられる。しかしながら、小塔院における建物配置は不明なうえ、小塔院推定地のほとんどは未調査であり、解明すべき課題は多く残る。今後の調査の進展に期待したい。 **（田中）**

註

１）第624・627次の報告は、基本的に『紀要2021』を再録したものであるが、一部書き改めた部分がある。
２）『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告書』2007。
３）奈良市教育委員会「平城京跡（右京一条三坊八坪）・西大寺旧境内（食堂院跡推定地）の調査　第15次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成15年度』2006。
４）『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990。
５）前掲註２。
６）宮本長二郎「奈良時代における大安寺･西大寺の造営」『西大寺と奈良時代の古寺』日本古美術全集第６巻、1983。
７）旧平城№14は2019年度に滅失。
８）神野恵・尾野善裕「興福寺系土師器皿の編年」『名勝旧大乗院庭園発掘調査報告』学報第97冊、2018。菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1983。
９）前掲註４、『紀要2014』。
10）前掲註７。

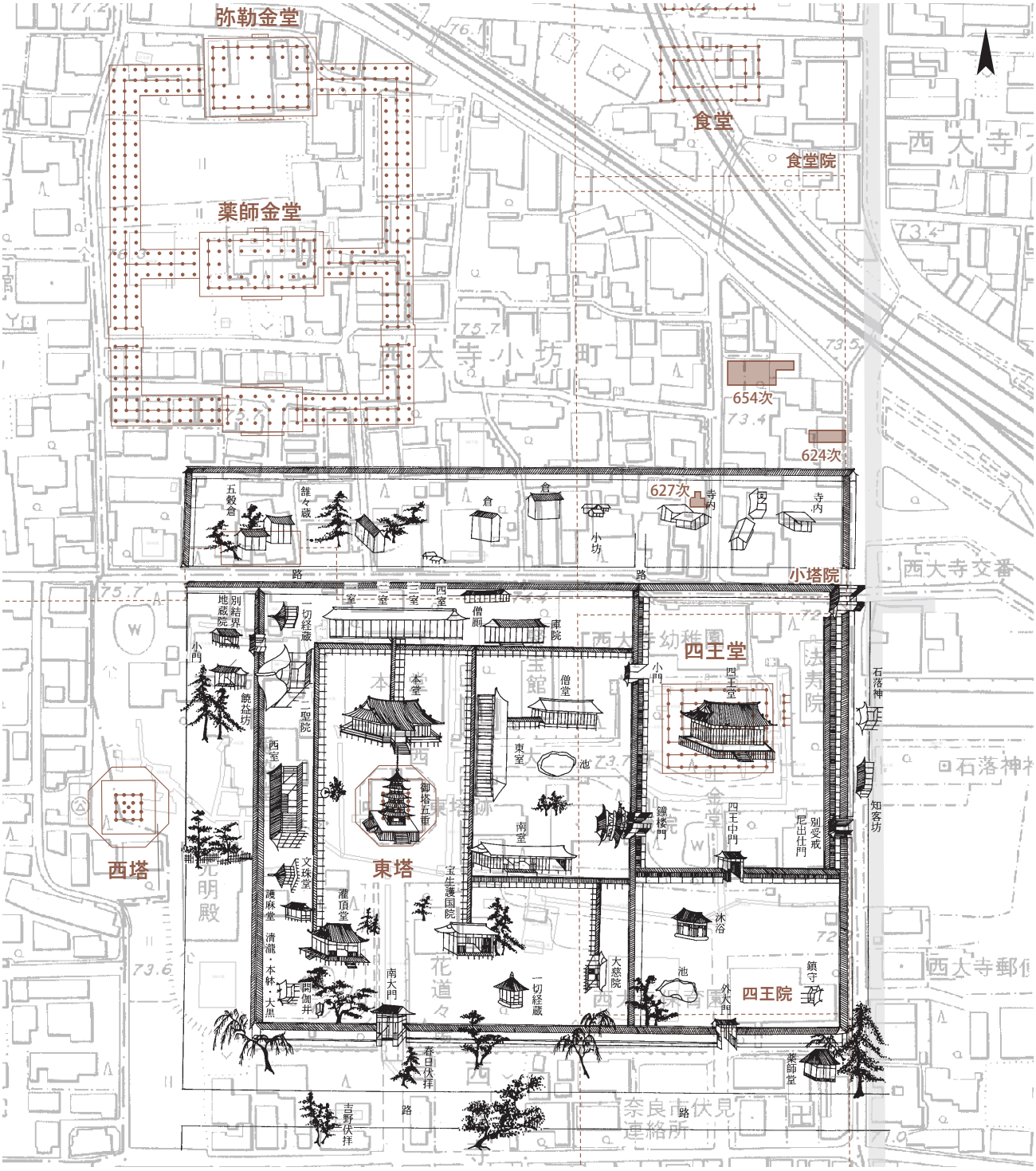

図 123 「西大寺寺中曼荼羅図」と伽藍復元図の重ね合わせ　1：2000（絵図の書きおこしは『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990 より）

11）軒丸瓦 189L（平安後期）軒丸瓦 96B（室町前期）、軒丸瓦 89G（室町前期）、軒丸瓦 96Q（室町前期）、軒丸瓦 189H（室町前期）などで指摘される（『法隆寺の至宝』第 15 巻、小学館、1992）。
12）前掲註 7。
13）前掲註 2。
14）前掲註 8 神野・尾野論文。
15）川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983。
16）前掲註 4。
17）絵図は、現在の西大寺境内の北面・東面・南面築地を基準に重ね合わせた。
18）『西大寺古絵図は語る　古代・中世の奈良』2002。